

幼児期の運動と園での生活・遊び技能の関連— 3 —

Part 3 The Relationship between Physical Activity in Infancy and Life and Play Skills in Kindergarten from Different Viewpoints Based on Sex and Age

児童学科 岩崎 洋子 朴 淳香
Dept. of Child Studies Hiroko Iwasaki Junko Boku*

抄 録 運動能力が円満に発達している幼児は、幼稚園での生活や遊びがスムーズに行われている傾向にあることを本紀要で昨年、報告した。本年度は被験者を加えて再検討した結果、運動能力と生活・遊び技能の合計点で $p < 0.01$ 、運動能力と粗大運動で、 $p < 0.01$ 、粗大運動と微細運動、生活技能、社会性、言葉で $p < 0.01$ の相関があった。運動能力と生活・遊び技能は5歳児より、4歳児で相関が高い傾向であった。男児は粗大運動、女児は微細運動と社会性、言葉に相関が高い傾向があり、男女児ともに日常の遊びで経験が多い運動が社会性や言葉に関連性が高い傾向は、従来の研究を支持する結果であった。

キーワード：幼児期、運動、生活・遊び技能

Abstract In this paper, we argue that infants with fully developed motor ability have a tendency to develop their life and play skills conspicuously in the final year of kindergarten. This year, we reexamined this study adding examinees. The results showed a correlation of $p < 0.01$ in the sum total of ability of physical activity and life and play skills, $p < 0.01$ in ability of physical activity and rough physical activity, $p < 0.01$ in rough physical activity, gentle physical activity, life skills, sociality and language. In physical activity and life and play skills, 4-years-olds have a higher correlation than 5-years-old. Boys have a higher correlation in rough physical activity, and girls have a higher correlation in gentle physical activity, sociality and language. We found that there was a many-sided relationship between the daily contents of play and sociality and language. That tendency supported our traditional methodology.

Keywords : infancy, physical activity, life and play skills

1. 目的

東京都教育委員会の調査では、小学生4年生の1日の平均歩数が1979年は27,000歩であったが、2007年には13,000歩に減少していることが報告された。波多野氏¹⁾の報告によれば晴れた日の3年生と幼稚園児ではほぼ同じ27,000歩台であり、小学生との幼児の間に1日における歩数に大きな差異はないと考えられる。筆者の1988年の調査²⁾では雨の日もあるが5歳児男児は約15,000歩、女児は13,000歩であり、同じように歩数の減少傾向がみら

れている。

このように歩数の減少は、運動経験の減少を意味し、運動能力の低下傾向の原因になっていると思われる。幼児期は総合的に発達していく時期といわれているが、運動経験の不足は単に運動能力の低下の問題に止まらず、幼児全体の発達を左右することに繋がる懸念もある。鈴木ら³⁾の良く動く子の特性を因子分析した結果、プレイ、リーダー、チャレンジ、ソーシャルスキルの4因子が抽出され、運動と生活、遊びのスキルの関連性が示唆されている。

本紀要の56、57号で筆者らは幼児期の運動能力

* 鶴見大学短期大学部

と園での生活・遊び技能との関連の手懸りを得るために測定を行った結果、性差、年齢差の特性はあるものの、その関連性が以下のように示唆された。

運動能力は粗大運動（運動技能）とは相関がみられたが、その他の生活・遊び技能には相関は見られなかった。粗大運動（運動技能）は微細運動、生活技能、社会性、言葉に関して相関がみとめられた。従来、運動能力が高い子は園での生活と遊びに関わる能力が高い傾向にあるとの報告があるが、本研究では明らかではなかった。

本年度は去年の結果をさらに検討し、運動と生活・遊びの関連性を明らかにするために、①運動能力と園での生活・遊び技能との関連、②運動・遊び技能の粗大運動とその他の生活・遊び技能との関連、③運動能力と生活・遊び技能の総合得点からの年齢、性による分布の特性を被験者を加えてさらに検討することとした。

2. 方法

対象園：横浜市内の住宅地にある私立幼稚園

対象児数：表1

実施期間

*運動能力検査は3年間ともに10月～11月

*生活・遊び技能検査は3年ともに運動能力終了後実施内容

*運動能力検査（東京教育大学体育心理研究室作成）25m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ、両足連続跳び越す、体支持時間の5種目を筆者らが測定し、5段階評価を用いて評価した。

*生活・遊び技能検査

津守らの発達検査項目、安梅の発達チェックを参考に、対象園の現在の生活・遊びの実態に即したものを、以下に示した5領域のそれぞれ5項目、計25項目を担任が保育担当してから6ヶ月後に判断した。

<生活・遊び技能検査項目>（表2）

明らかにできることは○、できないことが多い△、できない×とし、○は1点、△と×は0点として処理した。

詳細は昨年紀要（日本女子大学紀要家政学部57）を参照。

3. 結果と考察

表3から運動能力と園での生活・遊び技能の間で

表1 対象児の人数

	4歳/男	4歳/女	5歳/男	5歳/女
2007年度	41名	50名	43名	42名
2008年度	50名	51名	46名	51名
2009年度	39名	29名	43名	41名
計	130名	130名	132名	134名

表2 生活・遊び技能検査項目

分類	調査項目
粗大運動	ブランコ、縄とび、遊具の昇り降り、まっすぐ走る、ボール操作
微細運動	ハサミ、想像して描く、人物画、ひこうきの折り方やとばし方、楽器で音を出す
生活習慣技能	大便の始末、降園の支度、蝶結び、着替え、清潔
社会性	自ら考えたごっこ、鬼ごっこのルール、先生の話、あいさつ、順番やじゃんけんでの解決
言葉	名前をかく、幼児語、たずねる、数える、なぞなぞやしりとり

表3 運動能力と園での生活・遊び技能との相関

学年		運動能力	生活・遊び
全体	運動能力		.151 (**)
	生活・遊び	.151 (**)	
4歳児	運動能力	男児→	.226 (**)
	生活・遊び	.243 (**)	←女児
5歳児	運動能力	男児→	.207 (*)
	生活・遊び	0.154	←女児

は、1%レベルで相関があった。このことは運動能力が高い子は園における生活・遊び技能も高い傾向にあることが認められた。また、運動能力が高い子、運動が得意な子は園での生活・遊び技能が高いという報告を支持する結果であった。従来、運動能力が高い子は自主性や社会性が高いことが報告されている⁴⁾。また、運動能力と自信、積極性など性格に明確な関連がある⁵⁾との報告もされている。このように、園で活潑に体をを使う幼児は他の活動でも積極的な行動があり、その行動が自信や自主性を育て、

社会性を身につけることに繋がっていることを示唆している。

幼児期の発達は総合的であること指摘されているが、幼児期の運動も他の活動と関連しながら発達していくことが推察される。また、表3から5歳児より4歳児の方が相関が高い傾向にあった。5歳児になると女兒に関連性が見えないのは、遊びが運動より他の活動が中心になることが影響しているかもしれないが明らかでない。

表4-1の運動能力総合点と生活・遊び技能5項目との相関(全体)から、運動能力と相関が認められたのは粗大運動のみであった。この結果は昨年の研究と同じ結果であった。

また、生活・遊び技能の5項目の中で粗大運動技能(運動技能)は微細運動、生活技能、社会性、言葉との関連が認められた。このことは、園生活の中で運動に関する評価として、園の中にある運動遊具等の技能が優れていることがみんなの目に留まりや

表4-1 運動能力と生活・遊び技能5項目との相関(全体)

学年		運動能力	粗大運動	微細運動	生活技能	社会性	言葉
全体	運動能力		.224 (**)	0.047	.100 (*)	0.053	0.067
	粗大運動			.193 (**)	.271 (**)	.216 (**)	.220 (**)
	微細運動				.195 (**)	.315 (**)	.507 (**)
	生活技能					.450 (**)	.254 (**)
	社会性						.382 (**)
	言葉						

**p<.01, *p<.05

表4-2 運動能力と生活・遊び技能5項目との相関(4歳児)

学年		運動能力	粗大運動	微細運動	生活技能	社会性	言葉
4歳児	運動能力	男児→	.248 (**)	0.144	.208 (*)	0.071	0.073
	粗大運動	.372 (**)	←女兒	0.161	.230 (**)	0.125	-0.016
	微細運動	0.046	0.16		-0.003	.289 (**)	.473 (**)
	生活技能	0.118	0.106	0.04		.383 (**)	.246 (**)
	社会性	0.109	-0.028	.211 (*)	.407 (**)		.432 (**)
	言葉	0.033	0.073	.404 (**)	-0.094	0.057	

**p<.01, *p<.05

表4-3 運動能力と生活・遊び技能5項目との相関(5歳児)

学年		運動能力	粗大運動	微細運動	生活技能	社会性	言葉
5歳児	運動能力	男児→	.256 (**)	0.107	0.114	0.065	0.142
	粗大運動	.242 (**)	←女兒	0.124	.200 (*)	.332 (**)	.378 (**)
	微細運動	-0.001	0.102		.224 (**)	.227 (**)	.509 (**)
	生活技能	0.092	.211 (*)	.264 (**)		.412 (**)	.335 (**)
	社会性	0.085	.304 (**)	.310 (**)	.562 (**)		.400 (**)
	言葉	0.078	.226 (**)	.566 (**)	.431 (**)	.440 (**)	

**p<.01, *p<.05

すく、評価されやすいことが影響されているのではないかと考えられる。運動能力の評価は日常の運動場面では、判断されにくく、粗大運動項目にある内容のことが園での運動の評価となりやすいので、粗大運動技能と他の微細運動、生活技能、社会性、言葉と関連しているのではないかと推察した。このことは子どもの総合性の発達を考えると、それぞれの子どもが園での生活で充実して過ごすには、かならずしも運動に限らず自分の得意とする遊びがあることが自信や積極的な行動に繋がるのではないかと考えた。

表4-2の4歳児の男女別をみると運動能力と粗大運動は、男女児ともに相関が認められる。男児は粗大運動と生活技能に、女児は微細運動と言葉、社会性と生活技能に相関があったが、男児の方が各技能に相関が認められ、各技能が分化して発達するより総合的に発達している状況が推察された。

表4-3から、5歳児には表4-2の4歳児と比較すると運動能力と粗大運動との相関が認められ4歳児と同じであった。4歳児と異なることは男女児ともに粗大運動と生活技能、社会性、言葉との関連が認められた。このことは4歳児では個人で行う運動、小さな集団で行う運動が中心であり、遊びに社会性や言葉の必要性が少ないことが影響している可能性がある。しかし、5歳児になると、集団の人数が増え、複雑なルールの理解に言葉が介在する場面が多くなることから、粗大運動と社会性、言葉技能との関連が深まることに関連するのではないかと推察した。社会性や言葉の発達は、5歳児になると園での生活や遊びで友達との関わりの中での経験から発達するといわれるが、そのような発達に運動が寄与していると考えられる。

個々の分布の傾向を見てみる。

図1-1の4歳児男児の運動能力と生活・遊び技

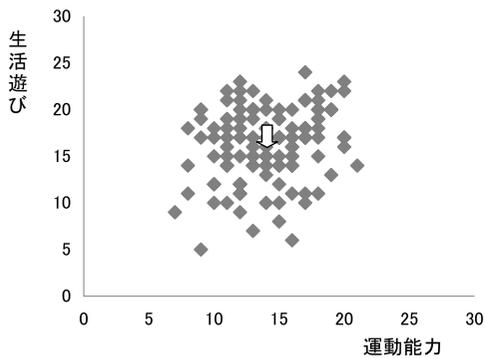


図1-1 運動能力と生活・遊び技能の分布(4歳男児)

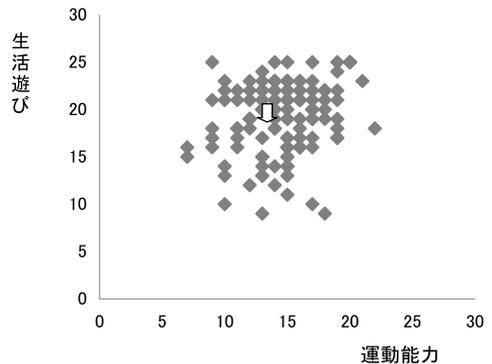


図1-3 運動能力と生活・遊び技能の分布(5歳男児)

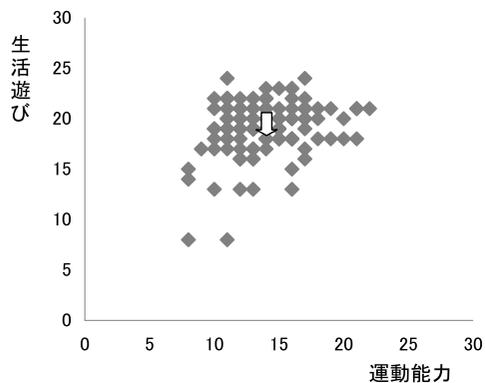


図1-2 運動能力と生活・遊び技能の分布(4歳女児)

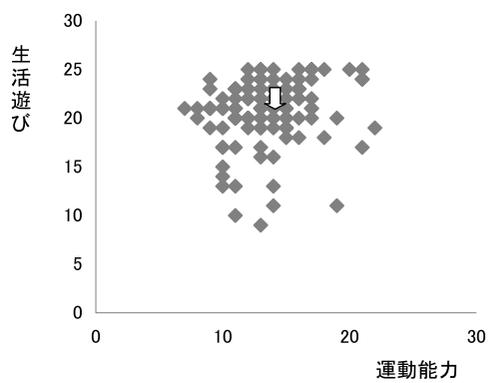


図1-4 運動能力と生活・遊び技能の分布(5歳女児)

能の個人分布をみてみると個人差が大きく、生活遊び技能にバラツキがみられる。運動能力が低く、生活・遊び技能が高い幼児の集団がみられる。また、両方ともに高い集団もみられるが、他より少ないが生活・遊び技能が低い幼児の中に運動能力が高い幼児と低い幼児が混在している。

図1-2の4歳児女児では生活・遊び技能が男児より高く、ばらつきが少ない。生活・遊び技能が高い集団は運動能力が高い群と低い群に分かれることが分かる。また、両方低い幼児や運動能力は高いが生活・遊び技能が低い幼児は少ない。男児は生活・遊び技能の個人差が大きいが、女児は運動能力の個人差が大きい傾向にあった。

図1-3の5歳児男児をみると4歳児より個人差が小さくなっている。運動能力が高く生活・遊び技能が高い群が一番多くなり、両方ともに低い群が少ない傾向にある。運動能力が高く、生活・遊び技能が低い群は少なくなっている。

図1-4の5歳児女児では、4歳児の時より、また男児より生活・遊び技能が高い傾向にあった。その中で生活・遊び技能が高い群は運動能力が高い群と低い群に二分されておる。生活・遊び技能が低い群は運動能力が低い幼児のほうが高い幼児より多い傾向であった。分布の特性をまとめると運動技能、生活・遊び技能の高低別に4つのグループに分けることができるが男女児、4, 5歳児ともに4歳児より5歳児の方が個人差が少なくなる傾向にあった。両方ともに高い傾向にあるグループが年齢とともに多くなるが、どちらかが低い、両方が低い幼児もかなりいることが図から分かる。園で保育者が指導に力を注ぐのは、運動能力が低く、生活・遊び技能が低い幼児やどちらかの低い幼児ではないかと思われる。このように発達が発達が相互に関連しながら発達することを考えると4歳児の時からその原因を明らかにして個人への指導を試みなければならぬと考えられた。

4. まとめ

- * 運動能力が高い子は生活・遊び技能が高い傾向にあることが示唆された。(5歳児より4歳児にその傾向がみられた)
- * 運動能力と粗大運動には相関が認められたが、他の4項目の間には相関がみとめられなかった。
- * 5歳児では男女児ともに粗大運動と生活技能、社会性、言葉との間に相関が認められた。
- * 4歳児では男児の粗大運動と生活技能のみに相関が認められた。
- * 生活・遊び技能総得点では女児の方が男児より高い傾向にあり、男児の方が個人差が大きい傾向であった。

以上、3年の測定の結果から、運動能力と生活・遊び技能との関連を求めた結果、運動の能力や技能は年齢、性により特性があるが、関連性が認められた。

この結果から運動遊びが運動能力や運動技能の発達に関連するだけではなく幼児期の生活や遊びの技能全般の発達と関連性があることが示唆された。

本研究の測定の実施に協力をしてくださった、鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園の園児の皆さんと保護者の方、また、本研究を長年、理解してくださり協力を惜しまない黒田園長、原口主任、クラス担任の先生方に心より感謝を申し上げます。

引用文献

- 1) 波多野義郎(編著):ウォーキングと歩数の科学, 不昧堂, 東京(1998)
- 2) 岩崎洋子, 他: PedometerのStep rateからみた5歳児の活動量について, 鶴見大学紀要 第3部保育・保健編, **24**, 37-50(1988)
- 3) 鈴木裕子, 他: 幼児の身体活動尺度開発, 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告, **2**, 99-106(2002)
- 4) 田中純子, 他: 幼児の運動発達と性格の関連について, 日本公衆衛生雑誌, **37**, 341-347(1990)
- 5) 杉原 隆, 他: 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係, 体育の科学, **60**, 341-347(2010)